



## ■主な内容

- UIFA JAPON 2023 年度第 31 回通常総会報告
- 第 30 回 UIFA JAPON 記念講演会  
「複合災害時代に備える災害に強い家とは “どんな家”」を聞いて
- 特集：「自然災害に備えて住まいるづくりの勘どころ」発行  
A 章「災害から学び、防災、減災を考える」  
B 章「敷地を知る」  
C 章「災害に備えた住まいるづくりの勘どころ」  
D 章「災害への身近な備え」
- 被災地通信 29「記憶の中の住まいプロジェクト」の取組み
- 会員の本「進化するトイレシリーズ」の出版



UIFAJAPON2023 年度通常総会、第 30 回記念講演会後の記念撮影

## UIFA JAPON 2023 年度第 31 回通常総会報告

### UIFA JAPON Annual Meeting Report 2023

森田 美紀

MORITA Miki



UIFA JAPON  
森田 美紀 会長

2023 年 6 月 17 日 (土) 13:30 ~ 14:20、神田にある「としまち研」の会議室をお借りして、対面とオンラインのハイブリッド方式で、第 31 回 UIFA JAPON 通常総会が開催されました。正会員 64 名のうち、会場出席者 20 名(対面 15 名、Zoom 5 名) 書面審議表決書提出 17 名、委任状 13 名の計 50 名で定足数を確認し、総会開催が成立しました。

第 1 号議案(2022 年度活動報告、会計報告、監査報告)は拍手と書面の賛成の計 50 名で承認されました。第 2 号議案(2023 年度の活動計画案、予算案)についても、賛成 50 名で承認されました。

今年度の総会は、初めて、対面とオンラインのハイブリッド方式で開催されましたが、記念講演会も同じ方式で一般参加の方も含めて開催し、おかげさまで、滞りなく終了したことをご報告いたします。ありがとうございました。

講演会終了後、4 年ぶりに懇親会も開催しました。久しぶりに仲間との交流を深め、オンラインだけでは得られない楽しい時間を過ごすことが出来ました。

## 2023 年第 11 回首都防災ウィーク UIFA JAPON 参加

関東大震災から 100 年にあたる今年度の首都防災ウィークに UIFA JAPON は下記で参加します。

- **みらくる TV 冊子発表**：9 月 2 日 (土) 15:00 ~ 17:00 「自然災害にそなえて 住まいるづくりの勘どころ」の冊子を編集グループメンバーで発表
- **防災カフェ開催(横網町公園)**：9 月 10 日 (日) 10:00 ~ 15:00 冷たいお抹茶と和菓子を提供。「勘どころ」の冊子を説明しながらプレゼント。
- **冊子紹介パネル展示(慰霊堂内)**：8 月 20 日 (日) ~ 9 月 10 日 (日) 「勘どころ」の冊子紹介パネルを展示。
- **防災フォーラム他**：9 月 10 日は防災フォーラムや大船渡サンマ 1000 尾炭火焼き無料提供など盛り沢山のイベントです。是非多くの方のご参加をお願いします。(稲垣 弘子)

## ■各活動の継続について

2022 年度は、少しずつ対面の活動を増やしてきました。6 回の役員会のうち、1 回は試験的にハイブリッドで行いました。各委員会のミーティングもオンラインと必要に応じて対面でも活動し、だれフォト活動では 4 年ぶりに岩泉小本駅の写真展「春遠からじ」の展示替えのお手伝いに 8 人が参加しました。

「自然災害に備えて 住まいるづくりの勘どころ」を(公財)建築技術教育普及センターの助成を受けて 3 月に発行することができました。各方面に配布したところ、とても好評で、更に増刷し、防災活動に役立てていきたいと思えます。

新型コロナウイルスが第 5 類へと移行したこともあり、徐々に対面の活動も増やしなが、今まで行ってきたリモートミーティングの良さも活かし、活動の幅を広げたいと思えます。

## ■海外交流について

台湾女性建築家協会(WAT)メンバーとの交流も、コロナウイルスの影響で延期となっていました。できることはないか、探っていきます。

IAWA との共同で「1×1 プロジェクト」を推進し、建築の仕事に携わる多くの女性たちに呼びかけて交流していきたいと思えます。「1×1 プロジェクト」で集まった作品で展示会を開くことも予定されています。みなさまのご協力をお願いいたします。

## ホームページリニューアルのお知らせ

昨年度より今銚さんのご協力のもと、ホームページリニューアルに向け目下作業中です。公開は 2023 年秋を目指しています。今回のリニューアルではデザインやページ構成を見直し、みなさまに快適にご利用いただく事はもとより、UIFA JAPON のアーカイブとしても活用できるように改善しています。尚、UIFA JAPON も設立から 30 年を経過し、貴重な写真を掲載した記録集等を発行してきました。今後も時代をさかのぼって写真を収集していきますのでお手元に写真がありましたら、事務局までご連絡ください。

(HP 部会 岸本 裕子)

「複合災害時代に備える災害に強い家とは“どんな家”  
を聞いて  
What Defines a Disaster-resistant House in an Age of  
Multiple Disasters?  
平野 正秀  
HIRANO Masahide



講師：中林一樹氏  
東京都立大学・  
首都大学東京  
名誉教授  
(写真：加部)

都市計画学会 2022  
年度石川賞受賞  
の祝いに UIFA  
JAPON より花を  
お送りしました。

### プロローグ

6月17日 UIFA JAPON (以下 UIFA と略す) 総会後、中林先生の記念講演が行われた。当初は会場(としまち研)での講演予定だったが、腰痛の為、急遽自宅書斎からのWEB講演となり、会場18名ウェブ17名の参加者(うち会員28名)だった。

### 記念講演の骨格

「複合災害に備える家づくり」を主眼とし、UIFAの災害復興支援活動はどんな「複合災害」に立ち向かって来たのか、またUIFAが3月に発行した小冊子「自然災害に備えて住まいづくりの勘どころ」(以下「勘どころ」と略す)の活用視点を織り込んだものだった。

#### ① UIFAの災害復興支援活動

地震(2004新潟中越：長岡市法末、2011東日本：岩泉町、2016熊本：益城町・西原村)や台風・大雨(2013東京：伊豆大島、2016岩手：岩泉町、2019宮城：丸森町)の災害現場に足を運び、住民・自治体・現地建築士会・関連NPOと共に支援活動を行ってきた。また東京都慰霊堂(1923関東大震災後創設)での、首都防災ウィークに積極的に参加してきた。また「コミュニティ支援」の立場から被災者と「オープンガーデン(法末)」「誰でもフォトグラファー(岩泉)」「どこでもカフェ(岩泉・郡山・益城・大船渡等)」「復興ハウス設計」等の多くの活動を行ってきた。

#### ②小冊子「勘どころ」

被災地へ行き「どこでもカフェ」等を活用し「相談会」(被災住宅リフォーム・仮設住宅生活改善・住宅再建アドバイス)を実施する中で、UIFAが確信した「災害に強い家づくり・地域づくりが必要だ!」ということが「勘どころ」の原点になっている。

#### ③講演の横軸と縦軸

この①と②を横軸に、縦軸に「複合災害への複眼視点の獲得」の必要性という概念が展開され、建築に携わるものが複合災害にどうアンテナを立て、臨むべきかを説く極めてスリリングな講演だった。要点をまとめてみた。

**1章：荒ぶる21世紀と脆弱化する社会**：現状を、大地動乱(大震災・噴火)、大気乱流(気象・巨大台風)、大水氾濫(豪雨多発・土砂災害)、大病散乱(コロナ蔓延)の時代とし、要支援者の増大する脆弱化する社会が迎え撃たねばならないと分析。

**2章：複合災害は2つある**：ここでは、複合災害を同時被災型複合災害と同時対応型複合災害に分類し、UIFAが支援した「中越と熊本」を例にこの2分類を説明していく。

**3章：災害に強い家・家づくりの基本方向**：今回の講演の中軸で、「勘どころ」に関連することも多い章。災害に強い家づくりとは「被害を出さず」「被害を拡大させず」「被害から素早く復興できる」ことを基本としている。

##### 3-1 地震災害に備える：

- 直下型地震の被害様相をイメージする(20項目)
- 2つの死(直接死と震災関連死)
- 自宅の耐震化・家具固定の効果を訴える

##### 3-2 地球温暖化による水害にも備える：

- 場所と敷地を知る=ハザードマップでのリスク確認
- 建物・庭と生活で水害に備えることを強調

**4章：鶴見川流域での治水・親水と流域治水**：治水・親水のまちづくりの重要性を地図(ハザードマップ)等で説明。

**5章：「同時被災型複合災害」化の可能性**：中越と熊本を例に説明。

**6章：複眼的に目指す防災まちづくり**：重要なのは被災後に目指す「復興目標」を立てるには①場所を知る②敷地を知る③建物・庭で備える④生活で備える、ことを強調。

### まとめ・地震にも水害にも強い家づくりへ

現実化する「複合災害」に対抗するには「複眼的視点を持ち住んでいる場所の災害リスクに備えて建てた家」と「その環境に対応して生活している家」の両面から災害に強い暮らしを可能にし、「地域をも助ける」とした。

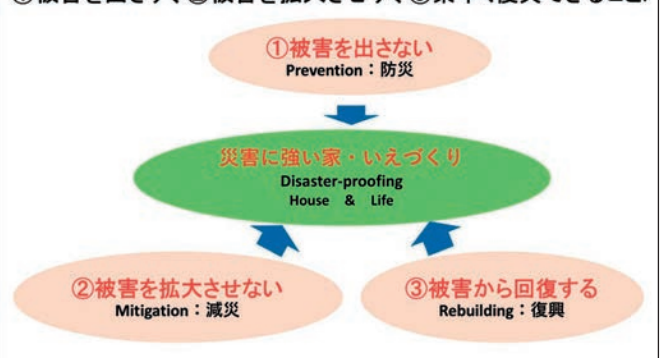
### エピローグ

講演を聞いた多くのUIFA会員が、住宅建設に携わる計画者・設計者・施工者の役割の重さを実感できたと思う。

私も、阪神淡路・新潟中越・東日本大震災の現地に立った時の「生き延びるためにはどうすれば!？」の感覚がよみがえった。更に、直木賞「地図と拳」(作者：小川哲)の主人公の言葉「建築には歴史と思想が詰まっています。地図も建築も時間を保存し、繋ぎとめるから。」がよぎった。本心から「荒ぶる21世紀」の危機から生き延びるためには既製の地図に頼らず、自分なりの『地図』(ハザードマップも地図なのだ!)を育てることが必要だと実感した。

### 3. 災害に強い家づくり・いえづくりの基本方向

“災害に強い家・いえ”=“災害によいすまい・くらし”とは、  
①被害を出さず、②被害を拡大させず、③素早く復興できること!



記念講演会資料より



『自然災害に備えて 住まいづくりの勘どころ』(2023年3月発行)が、被災地の住まいへの相談会等を通じて、多くの方々のお手元に渡り、読まれ始めています。編集に携わったUIFA JAPON編集グループ10名にこの冊子に込めた思いを語っていただきました。(p3-5)

最初に、冊子の全体像について、動機・着想・意気込み・今後の目標等、紙面インタビュー形式で伺いました(p3)。(広報委員会：御船杏里)



冊子の表紙

冊子全文は  
QRコードから

- A；選定の基準やルールは特にありません。会員の声(アンケート)を素直に整理し、できるだけ採用。分け方の難しいものもありましたが、編集グループ内で度重なる意見交換をし、正確性の再検証をしながらA～Dの4つに納めました。担当者が骨格を整理し、担当者以外が付加したり注釈を入れたり補足をしました。(p4～p5各章ごとに担当者の概略説明)
- A章：災害から学び、防災、減災を考える  
B章：敷地を知る  
C章：災害に備えた住まいづくりの勘どころ  
D章：防災への身近な備え

多様な自然災害、同時多発する自然災害に備える複雑さと向き合う

- Q；複雑さに尻込みしないよう、どこからでも読める、どこからでも1つからでも対策できる、そして総合力へと繋がると感じます。工夫された点は？
- A；どこからでも読み始めることができることを目指しました。ご理解いただきありがとうございます。関連する他章へ誘導しようと工夫しています。

### 『自然災害に備えて 住まいづくりの勘どころ』

発行について

井出 幸子、板東 みさ子

About the Publication

IDE Sachiko, BANDO Misako

### 既刊災害関連冊子との相違点、工夫、今出版する理由

Q；この時期に出版する理由は？

A；被災地での相談会を行ってきましたが、遠隔地に居るため、継続できないもどかしさがありました。少しでも相談継続となるように、一冊にまとめました。『東京防災(2015)』から間が空いた今、出版する意味があると考えました。

Q；これまでに発行された災害に備える書物との相違点は？

A；日常的に「まちづくりや住まいづくり」の研究や実務に携わるUIFA JAPON会員への「アンケート結果、今の時点で伝えたい自然災害に備える観点」と「被災地コミュニティ支援の経験」を伝えようとする点です。

Q；工夫した点は？

A；各地会員から集まったものを全てならべた上で、読み解き、ジャンルに分け、伝えたい内容を整理しました。「特に気がかりな点」や「見解が異なっても伝えたいこと」をコラム形式で表現しました。

### 「勘どころ」に込めた思い

Q；『自然災害に備えて 住まいづくりの勘どころ』というタイトルに、門戸を広く開けて、読み手を限定しないだらかさを感じました。「住まいづくりの勘どころ」にどのような思いをこめられたのですか？

A；「勘どころ」という表現をつかった理由は、災害について網羅型で解説することは限界があるので、前述のように、私たちが「今伝えたい点です」という意味合いを込めました。

### 内容選定の基準やルール

Q；A～D章までの分類分けにあたり、多様な自然災害に対して、どのように分類分け・内容の選定をしましたか？

### 編集グループでのまとめ方、製作期間、プロセス

Q；10人の意見をどのように出し合い、編集作業をこなすために、外せないと思う事は何でしたか？

A；まとめ方の課題は、モチベーションの共有・持続と粘り強く話し合いを続ける事でした。メンバー各自の日常業務との調整と、異なる意見のすり合わせにも時間がかかりました。見えない軌道を探しながら、それでも助成金の締め切り(2023年3月末)を目指しました。制作期間は、DPT朝倉さんが参画してから5ヶ月で印刷終了。会員アンケートから21ヶ月目です。

### 体裁の工夫、挿絵の掲載、舞台裏

Q；手に取りやすいサイズと厚さ、また優しい色合いと語りかける挿絵、要点集であって要点だけでないそのバランスの良さを感じます。ヒントを集め、相手にも響くものになる、ここに至るまでの舞台裏は？

A；私たちの専門分野であるからこそ、そうでない人がわかりやすく読めるように努めました。誰にでも伝わる言い回しになっているかメンバーが互いに厳しく目を光らせました。写真では情報が多すぎて、内容の焦点を絞れず伝えにくいので、イラストを多くし、また作画は外部に頼まず、内容を理解している担当者が描きました。サイズは、いくつもの既存の類似冊子を集め、それを参考に、気軽に手に取りやすいA5サイズ、中綴じ56頁としました。優しい色合いはDTP朝倉さんの色決めによるもの。朝倉さんが毎回zoom会議に参加していただき、編集グループの全員のやりとりを踏まえ、構成の調整をしてくれました。

### 続編編纂への期待

Q；住まいづくりの機微を伝える冊子づくりと続編編纂への思いについてお知らせください

A；今、読者から反応をいただき始めており、それに耳をすますことにしています。自然災害対策は常に更新されていますので、続編は、また異なった方々が別の視点でアプローチされることを期待しています。

(井出 幸子、板東 みさ子)

A章「災害から学び、防災、減災を考える」

担当：薄井 温子、宮本 伸子

Chapter A: Learning from Disasters, Disaster Prevention and Mitigation USUI Haruko, MIYAMOTO Nobuko

自然災害って？—近年の問題を知る

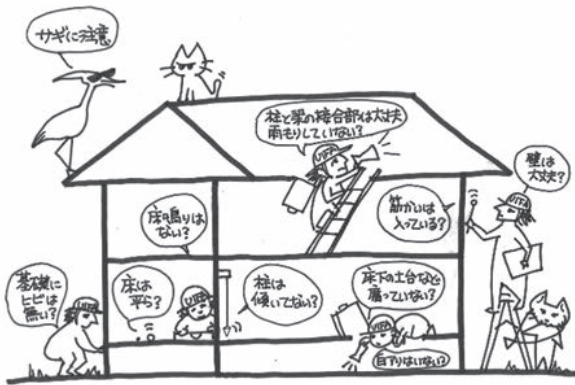
「冒頭のA章は、自然災害の種類とそれぞれの災害による影響の概要、備えるべき基本の心構えなどを網羅的に説明する」という方向となり、この冊子を手にした方に、住まいと災害を考えるチェックリスト的な意味があるようにという観点で整理を進めた。

初めのページでは、自然災害の全貌について、地震、水害・土砂災害、風災害、雪災害、そしてその他の災害として、感染症、火山、高温・多湿、塩害などを幅広くとらえた。イラストでは、家の周りなどで気にしておくべきことを、戸建てと集合住宅について書き込んであり、これで気になったら専門家に相談したり、隣近所で避難経路をきちんと確保したりする役に立つと思う。右下には古来地震を起こすと信じられていたナマズを、UIFA JAPON 会員がサーフィンのようにバランスをとりながら乗りつづけたという願いも加えた。

災害の特色と住まいへの影響を知る

各災害の説明では、災害ごとに重視するポイントがある。

- ① 地震には、住まいの耐震化が重要なので、住まいが建てられた時点を知ること（建築基準法の改正）
  - ・1981年6月1日（建築物全般の耐震性向上）以降か
  - ・2000年6月1日（木造の住宅の耐震）以降か
 心配であれば専門家や行政に相談する。ただし、弱みに付け込んでくるサギ（詐欺）に注意！



(作画：薄井 温子)

- ② 水害・土砂災害には、国土交通省や気象庁などから信頼できる情報を得ること  
ハザードマップを確認すること  
更に地域の歴史や過去の災害事例に学ぶこと
- ③ 風災害では風と家の向きに注目して、風をよける工夫をすること
- ④ 雪災害は、重さによるもの、軒先での凍結融解の影響、そして路面の凍結
- ⑤ 感染症を災害ととらえ、家の入口で感染症対策に備える工夫
- ⑥ 火山災害は、普段から山を見て、気を付けること

災害を知って、被害を避ける工夫を

日本列島では自然災害は避けて通れないもの。A章で挙げている災害に応じた住まいの工夫や日頃の備えなどは、B～D章の該当ページを参照できるようにした。

(宮本 伸子)

B章「敷地を知る」「勘どころ」の完成をみて

担当：伊藤 京子、上田 壽子

Chapter B: Knowing the Site of Your Housing

ITO Kyoko, UEDA Hisako

災害が多い日本

今年もまた九州熊本には線状降水帯が出て大雨が続いている。この冊子を作ろうと話がでたのがいつ頃だったか、わからなくなるくらい、なんと地震、大雨、土砂崩れと日本列島は災害が多いことか。

私たちが担当したB章は、土地の履歴、住んでいるところの土地の歴史を知ろうというもの。

昔は大字・小字（おおあざ・こあざ）がよく知られていて土地の長老などはそのいわれも知っていた。私の住んでいる奈良市内は昔からため池が多く、大和郡山では今でも金魚池がたくさんある。

敷地の情報収集：ハザードマップと地歴を知ること

私たち設計者は、建物を建てる計画前に必ず地歴を探索する。大雨があるたび、テレビなどでハザードマップという言葉が出てくるが、どれだけの人がこれを見ているのか、それがどこで手に入るのかも、知らないのではないかと！被災地支援で訪ねた東北の道路際で、ここまで津波が来ました、という表示をよく見かけた。関西の海なし県に育った私は、海の幸は知っているけど、海の怖さは頭の中にない。奈良で見かけるのは河川が氾濫して水がここまで来た、という電柱の案内だけ。関西は台風被害が多く河川が蛇行したり天井川になっているところもあるのに、洪水はあまり話題には上らない。

敷地の確認：家や土地を購入の前に

住宅相談などを重ねると、これは土地を購入前に調べられる事柄なのに、調べずに住宅を建てた後に河川の災害が発生した、というケースが少なくない。また最近、新築される若い方たちは、高い買い物をする割には、親に相談なしで住まいを決め、その親たちも知らないし、わかっていないということが現状のようだ。例えば地質を知ることにはその上に建てる住宅価格にも影響してくる。地盤が緩いところでは、地盤改良や杭基礎といった補強が必要だし、またそれらの土地が盛土なのか切土なのか、また畑や田んぼだったのか。20年前の住宅地図には池があったのに、その土地で地盤補強もしないで家を建ててしまい、家が傾いてきた…という相談も受けている。この冊子には、それらのヒントにもなってほしい事を盛り込んでいるつもりだ。

耳を傾けてみる、ということが大事

この冊子は当たり前の事しか書いていない。新しく住宅を建てる人も、長くお住まいの方もいるなかで、答えは一つではないかもしれないが、どうかアクションを起こす前に、誰かに相談する、耳を傾けてみる、ということが大事だと知って欲しい。（上田 壽子）



(作画：伊藤 京子)

## C章「災害に備えた住まいづくりの勘どころ」

C章の裏話 担当：加部 千賀子、谷村 留都  
Chapter C: Key Points for Preparing Your Housing for Disasters  
KABE Chikako, TANIMURA Rutsu

## 実際の地震を経験して

私の地震災害の初体験は1995年の阪神淡路大震災の応急危険度判定に協力したことである。当時、公共的な建築、ビル物は早急に判定されたが、一般の木造住宅にまで手が回らなかった。JIA近畿支部からの要請で2月中旬、名古屋から一番近い東灘区役所に行き、調査依頼のあった住宅10件分の資料を渡され2日間かけて訪問した。この体験はその後の設計活動において大きな戒めになった。

## C章の構成

C章の担当にあたり一番力を入れたのは設計するときを考えておく住まいの骨格づくり。これをわかりやすくするため25頁のプランにまとめた。このプランは架空であるが、私と加部さんの設計した住宅で似たものがあったのでそれらを合作して作った。その後、中林先生に助言をお願いした時に階段の位置にチェックが入った。そのまま押し切ることもできたが、井出さん、板東さんと私たち4人で侃々諤々の議論を繰り返し、最終的にこの案に落ち着いた。

## 脱稿して改めて考えたこと

災害に備えた住宅とはどんなものか再考してみたが、まとめると以下の4項目になる。

- 1) 普段の生活が快適で安全である。
- 2) 将来の家族構成の変化や高齢化に対応が出来る。
- 3) 近隣の人とのコミュニケーションがとりやすい。
- 4) 機械設備に頼りすぎない生活で災害時にも対応。

以上の視点でC章の「2. 災害に備えた住まいづくり」の各項目を見てみると、◇玄関ポーチは十分な屋根を作り、ベンチが確保できる空間にすることで近隣との接点になる。◇玄関は内と外とが交わり、外部から持ち込むモノや備蓄が多い。◇階段は安全や快適のための位置の検討と適正な寸法が重要。◇トイレ、水回りは高齢化対応への配慮のため配置する場所や適切な広さを確保すること。◇居間・食堂は在宅勤務が出来る空間確保の必然性が明白になった。◇台所は回遊動線にし、収納方法の工夫をする。◇寝室は納戸を活用するなど家具の配置に配慮し避難のしやすさを検討する。◇ガレージは備蓄庫にもなる。◇テラスは避難生活での楽しみ場所になるなど、日常の暮らし方と避難時の生活との融合を配慮していることがわかる。

## 住まいを考えている人々に

住まいを考えるにあたり、人々は何を考慮ののだろうか。広いLDK、子どもの数だけの子ども部屋…。若いときに家を建てる場合、経験も少なく、時流に乗り夢に向かって走りがちである。なんとなく必要な部屋を配置するだけでなく、それらを繋ぎ、かつ有効的に活用するための廊下や階段という基本的な構成をしっかりと作ること。そのうえでC章の各部位を参照にすれば、かなりいい住まいになると思う。

## 作業を終えて

C章担当の加部さんとは初対面であった。zoomや電話で何度も打ち合わせをする中でお互いの設計に対する価値観が似ていることがわかり、知らないことを教え合ったり調べたりして、大変有意義であった。設計者同士のこういう接点は重要であると再確認した。(谷村 留都)

## D章「防災への身近な備え」

Chapter D: Disaster Preparation  
担当：稲垣 弘子、松川 淳子  
INAGAKI Hiroko, MATSUKAWA Junko

## 小さいけれど大切な備え

災害は時と所を選びません。自宅でも、職場でも、どこにいても被災する可能性はあるのです。そのとき、どうする？

被災した後も家に戻って生活できる場合もあります。命を守り、被災を乗り越え、復興に向けて歩むために、日ごろからの心掛け、小さいけれど大切な、「備え」について考えてみました。今回、在宅で避難生活をする場合の備えに限ったことは、木造住宅の建て替えが進み、新耐震基準に合致した家が増えてきていること、高層集合住宅への居住者が増加していることなどで、被災しても自宅に留まる人が増えると予測されていることを踏まえてです。

## D章の構成

自宅が住める状態でも、自分が怪我をしてしまっただけ、留まれません。まずは、発災時の身の安全確保のための備えを。被災によるライフラインへの影響は避けがたく、電気、水道、ガスの供給がストップすると、復旧までの日々の生活をどのように維持していくかが、課題になります。安否確認の方法、停電時の対応、飲料水、生活水の確保、簡易トイレ、備蓄食品、書類の保管など現実の生活に必要な備えを調べてみました。

例えば、広報紙や情報誌などでは、生活水の確保として、浴槽の残り湯を捨てずに置く方法が提案されていますが、浴室に湿気が溜まり、木部の腐食や白蟻の発生が懸念されることなどには触れていません。対策として、24時間換気など換気に十分気をつける必要があります。また、小さい子どものいる家庭では、事故につながらないよう子どもの手の届かない所に鍵をつけるなど。このような事例は、「お勧めの備え」として注意喚起できるよう記載しました。

## 物理的な備えと共にコミュニティを大切に

東日本大震災を経験した方から、「まずは、子どもたちの食べ物と皆で持ち寄った」との話も聞き、物理的な備えが完備されても、急に助け合おうと思っても、思うようにはいきません。普段からの、家族、友人、隣近所との付き合い方が大切です。避難訓練や地域イベントに参加する等、顔見知りになっておくことが助け合いにも繋がります。被災を乗り越えるには、ひとりひとりが備えることと共に、コミュニティの大切さ、“生き抜く力を育む”事の必要性を強く感じ、伝えたいと思いました。

冊子作製にあたり、貴重なアドバイスを戴きました中林一樹先生に心から感謝申し上げます。(稲垣 弘子)



UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2023 年 8 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS OF QUANTITY OF LIFE DAINI-OSHIDA BLDG. 2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

URL :http://uifa-japon.com

被災地通信 29

「記憶の中の住まいプロジェクト」の取組み
小林 淑子 KOBAYASHI Toshiko
Initiatives of the Housing in Memory Project

東日本大震災後、「女性建築技術者の会」から、「記憶の中の住まいプロジェクト」(以下、キオスマ prj)を立ち上げるので協力して頂きたいとお話を頂きました。地元の宮城県建築士会ではその活動を引継ぎ、継続して行ってきました。ご存知の方もおられると思いますが、「キオスマ prj」では、被災された方から失った家や暮らしのお話を伺って、間取り図を作成し、お話しも文書にまとめ、その方だけの「アルバムの一ページ」として成果品をお渡ししてきました。

ところが、コロナ禍で聞き取りにお伺いすることができなくなり、活動の仕方を検討する中で、記録された37軒のお話がとても貴重なものだと思ってきました。その貴重さは公開に値すると判断し、冊子にすることにしましたが、さらに広く様々な方にお届けできれば、との思いで、クラウドファンディング(以下、CF)を活用することにしました。

CF 公開に向けて準備をしていた3月、UIFA JAPON の冊子『自然災害に備えて 住まいづくりの勘どころ』をご紹介いただきました。是非、CF に支援くださった方にこの冊子もお届けしたいと、返礼品の1つとさせていただきました。

活動を始めたころは感じませんでしたが、震災から10年以上たち、災害危険区域となつて人の住めなくなったかつての「まち」、すっかり新しい町割りがなされ、かつての景色がなくなった地域の欠片のような痕跡が、キオスマ prj だと思えます。遺したい、と思われる方がおられるのなら、お手伝いしていきたいと思えます。



キオスマ prj の CF のチラシ

会員の本

『進化するトイレシリーズ』の出版
小林 純子 KOBAYASHI Junko
Publication of "Evolving Toilets"



進化するトイレ 3部作 柏書房

●日本トイレ協会は今年で設立38年目です。目的は、トイレ文化の創出、快適トイレ環境の創造、トイレに関する社会的課題改善への寄与です。当会はその活動を通じ、快適トイレの普及改善に寄与してきました。快適さの創生、メンテナンス、まちづくり、学校、多様性、災害、環境問題等とトイレについて、多様な専門家や研究者、企業、利用者等が集まり、研究会やセミナー、シンポジウム等を実施しております。

●当会では会員を中心に知見を集め、過去3回、協会編集の本を出版してきました。

1987年のトイレの研究(地域交流出版)、2015年のトイレ学大事典、そして、2022年の、進化するトイレシリーズ・災害とトイレ・快適なトイレ・SDGsとトイレ(柏書房)です。今回の3部作は、当初、トイレ学大事典の分冊化と軽量化が目的でしたが、この間で社会もトイレ事情も変化したこと、新たな執筆者も加え執筆されたものです。

●「災害とトイレ」は、近年連続的に起こる災害、その時のトイレ事情の生々しい現実を、調査やその知見から教訓と課題を整理し、見逃しがちなインクルーシブにも言及しています。また、災害トイレは自助、共助が重要ですが、家庭の災害用トイレの備蓄率は20%にも満たず低いと記されています。

「快適なトイレ」は、快適さ世界一と言われる我が国のトイレ、その課題や今後を考える本です。汚水処理率が約90%の現実が快適化促進の原点であること。そのうえで快適さの意味、歴史、社会的変化、あらゆる人々への快適なトイレの提供、それらを具現化した各施設の実践、その課題と今後を37人の各分野の専門家に書いていただきました。

「SDGsとトイレ」は人権、世界的視点で考えた課題、誰一人取り残さないためにどうあるべきか、水洗トイレの先等、新しいテーマでトイレを取り上げました。

この3部作はトイレの過去、現在、未来が凝縮された本になっています。どうか一読ください。(一般社団法人日本トイレ協会会長)

役員会報告

2023年度第1回 2023年5月12日オンライン会議
対面とWebでの総会・記念講演会準備 写真展(陸前高田市)開催準備 首都防災ウィーク・防災カフェ開催準備 法末はがき交流報告 トルコ大地震義援金報告 IAWA・1x1参加準備 冊子「~勘どころ」増刷・発送報告 NL124号発刊報告 NL125号企画報告

2023年度第2回 2023年7月12日オンライン会議
総会・記念講演会開催報告 ホームページリニューア

ル報告 津波伝承館(陸前高田市)にて写真展開催
今年度Web交流会準備 冊子「~勘どころ」全建女にて配布準備 NL125号進捗報告

編集委員からひとこと

暑くて溶けそうです(薄井) / 金沢の全建女で溶けました(宮本) / 全建女にて『勘どころ』冊子を全県に配布(井出) / ネットで大概のことが済む! これは便利でもあり、心配でもある(渡邊) / 台風で翻弄されたお盆でした(杉原・編集長)